

安全な国産グリーン社会

コラム SDGS Safety Domestic Green Society

第32回

新たな25年に向けた再出発 —夢ある実践と貢献—

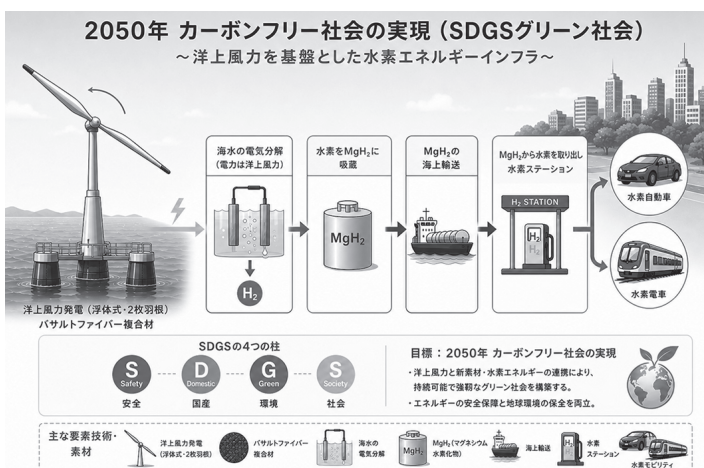
一般社団法人 洗楓座 代表理事 佐藤建吉

はじめに

国連が提唱するSDGsが広く浸透する一方、その言葉だけが独り歩きし、理念が空洞化している場面も少なくない。だからこそ筆者は、独自の「SDGS」という視点を提唱してきた。

- S: Safety (安全)
D: Domestic (国産・地域性)
G: Green (環境・循環)
S: Society (社会)

私たちは新型コロナパンデミックを経験し、「安全」が社会の根幹で



筆者の想定する「次の25年構想」イメージ(筆者作成)

あることを、強く思い知らされた。医療、防災、物流、食料、エネルギー等々。社会はこれらに、平常時には見えにくい脆弱性を抱えていた。

まず、SafetyのSについては、その象徴的な課題の一つが、殺菌・抗菌対策である。筆者は、その具体的な技術として、光触媒の適用と普及を重視している。光触媒は、空気や水、接触面の衛生環境を維持し、感染症対策だけでなく、空気の清浄化などの面からも、暮らし全体の安全性向上にも寄与できる。その技術と素材について取り上げたい。

グリーン社会の構想と構築

再生可能エネルギー源として筆者が重視するのは、洋上風力発電である。筆者の住む町は、千葉県いすみ市である。銚子での事業案は三菱商事の関わりでマイナスイメージをくり出したが、これも再出発として推進しなければならぬ。

世界への貢献

このように、個々の技術を個別に利用するのでなく洋上風力による再生可能エネルギーの製造・貯蔵・利用を含めたグリーン社会への夜明けができる。それは、まさに相互につながる複合的な社会基盤となるのである。

構想する技術適用はもはや可能であり、そのモデル開発を進めたい。以上を簡単にまとめる。以下のように。
○光触媒による殺菌・抗菌：安全安心のナノ微粒素材による確保
○パサルトファイバーによる国産強靱化とその洋上風力への適用：軽量・高強度・耐食性
○海上での海水の電気分解によるMgH2の製造：グリーン水素利用の拡大と水素ステーションへの適用と水素社会の誘導
○以上によるグリーン社会の構築

は、日本には薄れつつある躍動感や積極性を感じた。しばしば言われる「30年のゼロ成長」の結果、日本は、かつての先進国でありながら、実質的には停滞した、成熟途上国のような状態にあるともいえる。
日本が進むべき道は、中国や韓国の後追いではない。むしろ、その二国がこれから経験するであろう、人口減少、高齢化、エネルギー制約、環境負荷、成熟社会の課題を、日本が先に見据え、先行して解決モデルを整備することである。
それに対する積み重ねこそが、日本の新たな優位性になる。その到達点「SDGS」である。既述のように、それぞれに独自の要素技術があり、施策があり、適用がある。

おわりに

重要なのは、諸外国と連携しながら進めることである。外に向かつては国際化であり、内に向かつては「民際化」である。民際化とは、市民一人ひとりの個性や能力を尊重しながら社会を形成していくという考え方である。

単なる国産志向ではない。エネルギー安全保障や産業基盤を、自国でどこまで維持できるかという問題である。少し脱線するが、筆者は「問題」という言葉を用いた場合には、「答え」があると限界をつけている。答えのない「問題」はないのである。何とか問題、というときには、必ず答えがある対象であるといえる。
国内や国産の問題への中核技術として、筆者は「パサルトファイバー」に注目している。「パサルト」は玄武岩であり、火

そして重要なのは、こうした技術や運用は、日本国内だけで完結するものではないという点である。国内での実績は、直ちに諸外国への適用、すなわち輸出産業にもなり得る。それは単なるモノの輸出ではなく、「安全な国産グリーン社会」という社会モデルそのものの輸出である。
最近、筆者は中国と韓国を訪問した。そこで

連載